

平成 21 年度自主防災組織リーダー研修会 参加報告

比叡平一丁目自主防災会会長 笈田 昭

平成 22 年 1 月 14 日（木）から 15 日（金）にかけて 1 泊 2 日で、標記研修会が滋賀県消防学校（東近江市神郷町）において開催され、山中・比叡平学区からは笈田が参加した。

この研修会の目的は、「県内の自主防災組織、自治会などの役員を対象として、防災に関する知識や技術を習得されることにより、大規模災害発生時に県内の各地域の自主防災組織が迅速・的確に活動できるよう、リーダーとして活躍できる人材の育成を図る」というものである。主催は、滋賀県および財団法人日本防火協会である。

参加者は、県内の自主防災組織や自治会のリーダー・役員、県・市町・消防の担当職員等、計 31 名であった。

研修内容

1. 1 月 14 日、10：00－10：30：開講式、オリエンテーション（滋賀県防災危機管理局、田中弘明参事）
2. 1 月 14 日、10：30－12：00：講義「自主防災組織の活動について」（防災危機管理局、南圭子副参事）

「できることから地震対策～我が家で、地域で！～」とのタイトルでパワーポイントによる講演があり、その中で、DVD「地震だ！その時どうする？」の上映、阪神淡路大震災の実際映像と再現映像、当時を振り返っての語り（当時 4 歳、6 歳）が示され、滋賀県の災害（過去の地震など）、家具の固定化率（滋賀 15%、静岡 60%以上）、災害時伝言ダイヤル、自主防災組織活動マニュアル、新潟県柏崎市関町町内会自主防災会の活動例、などが説明された。

特に、地震に対応する平常活動、地震発生後の応急時、復旧時、復興時の活動においては、自助・近助・互助・共助・公助の協働が必要である点が強調された。

自助：自分や家族単位における家族と財産を守る日頃からの備えおよび行動がまず原点である。

近助：隣り近所や所属する各班単位のイメージ（ご近所のお助け隊）。

互助：町内会や自主防災会単位のイメージ（地縁・血縁を含む）。

共助：コミュニティセンターや地区単位のイメージ（ボランティアや団体・社会福祉協議会・企業商店街・NPO などを含む）。

公助：市役所・消防署・県・国など（個人や地域・民間の力では解決できないことを行う）。

3. 1 月 14 日、13：00－14：20：実習「救出訓練」（消防学校、久田幸広教官）

広大な訓練施設「練成館」内において、倒壊家屋に閉じ込められた人（人形）を救

出する実習が 10 人 1 班で行われ、その状況について反省会を持った。



写真 1．倒壊家屋および下敷きの人（人形）



写真 2．ジャッキをかける所を相談



写真 3．助け出された人（人形）

各班とも、班長を決め、その指示の下に倒壊家屋の梁・柱等を除去するとともに、ジャッキアップする梁などを決め、いくつかのジャッキを用いて人形を引き出せるような空間を作って、救出した。

反省：1) 下敷きの人に対する呼びかけ、クラッシュシンドロームに留意した行動が無かった。2) 班長の指示が徹底していなかった。班員の独自の判断でジャッキアップしていた。これは更なる家屋崩壊につながる虞がある。3) 適切な種類のジャッキを使っていたかどうかの問題もある。→総じて、リーダーの的確な指示が出ていなかった。リーダーの状況判断能力、家屋の一部を動かすことによる更なる家屋倒壊の

予知、ジャッキ等の最適な使用判断、グループ全体の行動を把握する能力、その他被災者に対する細かな心遣いなど、リーダーが備えるべき資質と背負っている責任は、大変大きいものがある。

4. 1月14日、14:30-17:00: 実習「応急手当・救命講習」(消防学校、門西吉則教官)

- 1) 搬送実習: ロープの結び方「本結び」、二人で一人を搬送する方法(前後、側方支持)、椅子を用いる方法、毛布で担架を作り搬送、毛布のみで4人で搬送、ロープで担架を作る方法、上着で担架を作る方法などを習得した。



写真4. ロープの結び方「本結び」



写真5. 搬送の方法



写真6. 毛布で4人がかりで搬送



写真7. ロープで作った担架

2) 一次救命処置（BLS）実習：傷病者発見→意識の確認と呼びかけ→119 番通報と AED 手配→気道確保・呼吸確認→人工呼吸→心臓マッサージ→AED 到着・電源 ON →電極パッドを貼る→傷病者から離れる→ショック→心臓マッサージ。救急車が来るまで、あるいは傷病者が能動的な動きを示すまで行う。



写真8. 人工呼吸実習状況」



写真9. 心臓マッサージ



写真 10. AED の使い方

3) 三角巾のたたみ方と使い方の実習：前額部の圧迫包帯要領、頭部の被覆包帯要領、胸部の被覆包帯要領、手の被覆包帯要領、取扱い上の留意事項など。



写真 11. 三角巾とダンボール紙による固定



写真 12. 三角巾による胸部被覆包帯

5. 1月14日、17:10-17:55、18:45-20:45：グループ討議・発表「避難所 HUG」
(防災危機管理局、堀川経史主事)

1) 避難所運営ゲーム HUG (Hinanjo Unei Game) とは？

避難者の年齢、性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームである。

- 2) ゲームの条件：1月17日（日）午前11時マグニチュード7.3の大地震発生、避難所である小学校、午後4時から11時の間の運営。停電、断水、ガス遮断、主に3つの地区から次々と避難者が集まる。老人、乳幼児、妊婦、外国人、車椅子の人、車で避難してきている人などがある。雨脚が強くなってきているので順次体育館、教室へ入れる必要あり。非常用発電装置なし。仮設トイレなし。テント2張りあり。調理室なし。備蓄食料なし。救護所設置せず。
- 3) ゲーム実行：5人で1班、読み上げ係がカード（避難者情報やコメント、1×2m²）を読み上げて、プレイヤー4名に渡し、できるだけ早く避難場所を決定して図面上に配置する。あるいはたとえば「トイレを使えないが使いたい人がいる」場合の対処を瞬時に決定しなければならない。249枚のカードの処理を1時間半で行う。
- 4) 意見交換：各班が苦労した対処法を発表し、他の班がそれに対してどう解決したかを話し合う。我々の班では「プールの水を運んでトイレを使うようにした」が、他の班では「我慢させた」とか、「浄化槽を直接使った」とかの対応を示した。



写真 13. 相談しながら決定する



写真 14. HUG 実施結果

6. 1月15日、8:00-12:00：演習「災害図上演習 DIG」（山口大学理学研究科、瀧本浩一准教授）

1) DIG（Disaster Imagination Game）の説明

手法は人によって異なる。机上で住民が持つ地域のイメージを共有する。防災町

歩きでイメージを確認し、修正し、ハザードマップ等も参考に、地域防災マップを作成する。ここまでは、面的な相場観の形成である。次に、地域における災害の時間的な流れを想定し、時間軸に対する防災組織の行動マニュアルを作成する。これが時間的な相場観の形成である。

- 2) 能登川町の地図をもとに、水害を想定した DIG を行う。
- 3) 現場を視察する。写真を撮り、問題点や災害時に利用できる店、施設などを記録する。
- 4) 部屋に戻って、メモや写真をマップに貼る。アイコン（safe-design.com からダウンロードできる）も使う。
- 5) 対応編：水害・水防編、地震・耐震編
- 6) 自主防災の持続を考える（DIG とは離れて）



写真 15. DIG の防災マップ例



写真 16. 能登川町の街歩き

7. 1月15日、14:00-16:30: 見学・体験「地震体験、煙中避難体験、強風体験、消火体験など」(於: 京都市市民防災センター)

震度7の揺れ、煙が充満している中での避難、32m/sの風、消火器を用いた模擬消火、などを体験した。



写真 16. 煙の中を避難する訓練モニター



写真 17. 消火器使用訓練



写真 18. 震度 7 の地震の揺れ体験



写真 19. 強風体験

以上